資料をよむ ～歴史民俗資料館所蔵の竹内氏寄贈縄文遺物から～

先史部会編集委員　安孫子昭二

はじめに

先史部会（部会長　谷口康浩國學院大學教授）では、平成28（2016）年７月より、向郷（むかいごう）遺跡から出土した縄文時代中期の遺物の整理作業を行っている。これらの遺物は、歴史民俗資料館が昭和57（1982）年７月に、当時市内に居住されていた竹内氏から、市文化財保護行政の推進に役立てるために一括寄贈を受けた資料である。

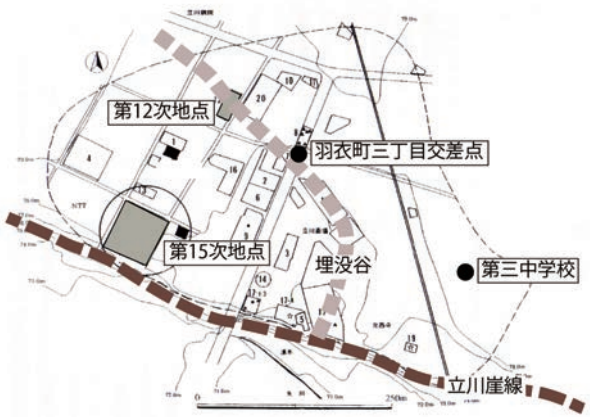
遺物は、竹内氏が小・中学生だった昭和40年代終わり頃から50年代初め頃（1970年代前半）に、羽衣町三丁目交差点の東南側付近の畑を地主に掛け合って独力で発掘したものという。その発掘自体は文化財保護法に抵触するために薦められるものではないが、小・中学生が文化財保護法の何たるかは存知しない時世の事である。それはともかく、いま羽衣町の辺り一帯はすっかり宅地化され、遺跡の面影が残されていない。

向郷遺跡が初めて発掘されたのは昭和29（1954）年のことである。以来、市教育委員会による発掘調査や試掘調査、立会調査が平成28（2016）年３月末までに104次に及んでおり、遺跡内の時期的な分布範囲の違いが次第に浮彫りにされてきた。その中で竹内資料は、これまでに明らかにされてきた向郷遺跡の内容を補強する、極めて充実した一括資料である。

先史部会では、貴重な資料を寄贈して下さった竹内氏の好意に報いる意味でも、資料の存在価値を現在の研究水準で明らかにする必要があると考え、資料を整理して報告書を作成する予定である。

向郷遺跡の中の竹内氏調査地点

向郷遺跡は立川市内で最大規模をほこる縄文時代中期（約5500～4500年前）の集落遺跡である。国立市との境界に近い錦町四丁目・羽衣町三丁目に位置し、東西約600m、南北約400m、面積およそ24haもの広大な範囲である（図１）。遺跡範囲南側は立川崖線で画されている。



和田哲2011「立川市向郷遺跡の集落規模」（『多摩考古』41 多摩考古学研究会）を改変

図１　向郷遺跡の位置

本遺跡を一躍有名にしたのは、昭和63（1988）年～平成２（1990）年に市営住宅の建て替えに伴って調査された第15次地点で、ここからは290基からなる縄文時代中期後葉の大規模な環状墓群（かんじょうぼぐん）が検出された。それをとりまく環状集落の様相もうかがえる。これに対して、平成元（1989）年にたましん事務センターの建設に伴って調査された第12次地点付近には中期中葉の集落の存在が確認されている。市教育委員会で竹内氏から遺物の寄贈を受けた当時の担当者によれば、向郷遺跡の中期の集落は、埋没谷（まいぼつだに）※1をはさんで東西に向き合って広がっていたという。西側の集落を代表するのが、第15次地点や第12次地点、竹内少年が発掘したとされる羽衣町三丁目交差点付近が相当し、東側の集落はJR南武線の東側にある第三中学校付近が相当するという。

はじめ、中期中葉の集落が台地の内側深くに形成されたのは、飲料水が得られる埋没谷が、立川病院の辺りを谷頭として南東方向に入り込んでいたからであろう。集落はその後、中期後葉になると南側の第15次地点付近に移動したのである。

遺物のこと

寄贈された遺物は、縄文時代中期の復元された土器16個体をはじめ、遺物整理用コンテナ（55cm ×35cm ×10cm）に土器片が32箱、石器類が17箱もあった。このうちの完形土器優品５個体は歴史民俗資料館に常設展示されているので、ご覧になった方も多いであろう（写真１）。

遺物を広げて整理してみると、竹内少年は、復元できるような目立った土器片だけでなく、微細な無文の土器片や石器の小剥片などもじつに丹念に取り上げている。掘ってきた遺物は丁寧に水洗いして、発掘した日付けから出土地点や住居番号まで、ポスターカラーで注記している。また土器片は個体分類され、木工用ボンドで接合し、不足の部位は石膏（せっこう）で補強し器形復元している。これが小・中学生が一人でやった所業なのか、竹内少年はいったいどこでこのような正統な考古学的手法を身につけたのだろうか、あたかも学術的な発掘調査から整理作業までを、独力で遂行しているのである。

土器　完形に復元された土器が16個体あったが、さらに整理を進めると修復可能な土器が14個体にのぼった。おお

写真１　歴史民俗資料館に展示されている竹内氏寄贈の完形土器
①～④：勝坂式土器、⑤加曽利Ｅ式土器（歴史民俗資料館提供）

※１…かつては谷であったが、現在は埋まって平坦になっているところ。

まかに土器の時期を識別すると、中期中葉の勝坂式期（東関東の阿玉台式をわずかに含む）が256個体以上、中期後葉の加曽利Ｅ式期（連弧文・曽利式を含む）が35個体以上であり※2、中期中葉が約90％と圧倒的に多い。

勝坂式土器には、主に食べものを煮炊きする深鉢類と盛りつける浅鉢類の器形があるが、９：１の割合になろうか。深鉢にもいくつもの型があるが、口縁には装飾的な大きな把手や突起が付され、体部には粘土紐を貼り付け、あるいは太沈線※3で文様が描かれるなど、量感に富む豪壮な作りが多い。出土する大多数はそうした土器の一部をなす破片である。

深鉢の形態が文様装飾の変化に富むのに対して、浅鉢は器外面よりも内面が丁寧に器面調整されている。

石器　石器には打製石斧をはじめスクレイパー※4、石皿、磨石、叩石、石匙※5などがある。打製石斧は188点で全体の66％を占めてもっとも多い。次いでスクレイパーが82点で30％である。打製石斧やスクレイパーに用いられた石材は、砂岩、ホルンフェルス、頁岩の順に多い。これら石材の大方は多摩川畔で調達できるので、石器は河原で製作したのだろうが、集落内でも河原から石材を持ち込んで石器製作したようで、大小の剥片が約23.5kg もある。

打製石斧は４：６の割合で完形品よりも部分欠損の方が多い。部分欠損品には、頭部側あるいは刃部側が欠損したものと頭部、刃部の残欠品もあれば、頭部・刃部の両端が欠損したものも結構多い。欠損の仕方から、これら打製石斧の使用法を復元できるかもしれない。

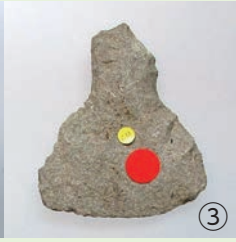
スクレイパーには半月形とハマグリ形がある。半月形は、大きく横剥ぎした剥片の背を調整し、先端側がそのまま鋭利な刃部となるもので、44点ある。往々にして打製石斧や不定形石器とされてきたが、横剥ぎ剥片のために頭部側、刃部側とも斜めに削がれており、弥生時代の石包丁に似た恰好である。ハマグリ形は38点で、大きめの円礫（岩石の破片で丸みを帯びたもの）から剥ぎ取った剥片の先端部を刃部とするが、厚手剥片は礫の表面を剥ぎ取って掌に収まりやすいように調整している。大きめに剥ぎ取られた剥片のようだが、刃部には細かな使用痕が認められる。

おわりに

かつて考古ボーイだった竹内氏から資料の一括寄贈を受けて35年になる。若かりし竹内氏が心血を注いで発掘した縄文遺物が、いまようやく立川市史の一環として整理され、学術的に日の目を見ようとしている（写真２）。なお、現在は整理段階であり、資料の詳細な検討は報告書で行うため、資料の見解が本稿と異なる可能性があることをご了承いただきたい。

写真２　整理作業風景

※２…縄文土器に施された文様や文様を付ける方法の違いなどに基づいて、勝坂式や加曽利Ｅ式、曽利式などと分類される。
※３…縄文土器に、棒状の道具で描かれた太い線のこと。
※４…イノシシやシカなどの獲物の毛皮に付着する脂肪をこそげ取るための石器。
※５…獣肉などを裁断する個人用と思われるナイフ。外形が匙に似ているため命名された。中期には、しばしば粗雑な石匙が墓壙から出土する。



①スクレイパー（半月形）　②スクレイパー（ハマグリ形）　③石匙　　（歴史民俗資料館提供）